

部に色調選択実習を導入している。今回その実習内容を紹介するとともに、実習中に行った院内生によるシェードセレクションの結果について報告する。

【方法】対象は、奥羽大学歯学部第5学年臨床実習生で、平成19年度が36名、平成20年度が39名である。実習は5～8人程度の少人数のグループで行った。

平成19年度実習では、まずはじめに、簡単な解説を行い、次に実際の色調選択体験として、一人ずつ被選択者になって残りのグループメンバーから上顎右側中切歯をビタ社製の2つのシェードガイドを使用して色調選択してもらった。つづいて同じ歯を松風社製色彩計シェードアイを用いて測色してもらい、最後に実習に対する感想の自由記載で終えた。

平成20年度は使用するシェードガイドをビタパンクラシカルを主とし、グループ全員でディスカッションしながらの色調選択と、総括ディスカッションを加えた。

【結果】院内生が選択したシェードはかなりばらつく結果となった。グループの選択結果とシェードアイの選択結果が一致したものは、約1/4であった。

【まとめ】平成19年度から臨床実習に導入した色調選択実習は概ね好評であるが、実際の臨床の場で色調選択を行う機会は少なく、現状では実習効果が直接実感出来にくいと考えられるため、なんらかの工夫が必要と感じられた。

18) DIAGNOdent®による歯根破折の診断に関する基礎的研究

○田辺 理彦, 木村 裕一, 梅里 朋大, 平山 圭史
六角 玲奈, 笹原 麻美, 東田 大輔, 佐藤 穂子
森下 浩江, 今井 啓全, 佐々木重夫
(奥羽大・歯・歯科保存学)

【目的】歯の破折にはさまざまな分類があり、不完全破折の診査・診断が術前では困難なことが多い。歯根破折の診断ではいろいろな方法が提唱されてきたが、確実にしかも簡単に短時間で診査できる方法は現時点ではまだ存在せず、いろいろと模索している状況である。DIAGNOdent®は齲

蝕の診断に使用するために開発されたが、齲蝕の診断以外にも応用できる可能性がある。本研究の目的は歯根破折の診断がDIAGNOdent®によってどの程度可能であるか、さらに吸収波長がDIAGNOdent®の波長に近いメチレンブルーによる染色を併用することによって診断がより確実になるかについて基礎的研究を行い、臨床への応用の可能性を探ることである。

【材料と方法】歯根部に齲蝕や破折が認められない単根のヒト抜去歯で歯根部分のみを試料として用いた。DIAGNOdent®による試料の測定方法はハンドピースのチップを照射面に対して垂直方向に約0.5mm接近させて瞬間的に左右に約0.5mm動かし、先端から約3mmの間を往復後、DIAGNOdent®の値(以下D値と略記)を記録した。95本の歯根を用いてメチレンブルーによる染色時間や濃度とD値との関係、メチレンブルー濃度とpHの関係、歯根表面における人工的な溝の幅や深さとD値との関係、人工的に引き起こした歯根破折の前後におけるD値、染色液に含まれるエタノール濃度がD値に及ぼす影響を調べた。

【結果】メチレンブルーによる染色時間とD値との関係では2秒後には急激に増加し5分間でほとんど平行状態になった。メチレンブルー濃度とD値との関係では濃度依存的にD値は増加した。メチレンブルー濃度とpHの関係に関しては、1%ではpH4.4と酸性を示したが、希釈を行うと中性に近づき、10⁻²%ではほぼ中性を示した。人工的な溝の幅が大きくまた深いものにおいてD値が高くなる傾向が示された。人工的に引き起こした歯根破折前後におけるD値はメチレンブルーによる染色の有無に関わらず有意差が認められた。メチレンブルー染色液に含まれるエタノール濃度がD値に及ぼす影響については、20%と40%の含有濃度において、エタノールを含有していないメチレンブルー染色液と比較して有意にD値が増加した。

【考察】DIAGNOdent®を使用するうえで問題になるのは再現性である。今回、再現性を向上させるためにDIAGNOdent®が反応しない白色の紙をバックグラウンドにして、しかも距離を20cm以上保ちながら測定した。しかし、臨床で使用する場合にはD値に影響を与えるさまざまな要因が

存在するので、いかにして妨害因子を除去するのが工夫する必要がある。さらに染色液の最適濃度や歯根破折の確定診断をするためにはD値がどの程度なのか検討をしなければならない。また、臨床応用する前にはメチレンブルーとエタノールの口腔内組織に及ぼす影響や染色液の特異性についてさらに検討する必要があると考えられる。本研究の結果から、染色液としてメチレンブルーを使用することでDIAGNOdent[®]が歯根破折の診断に応用できる可能性があることが示唆された。そしてメチレンブルー染色液にエタノールを20%または40%含有させることによってエタノールを含有していない染色液と比較してD値が有意に増加したことから特異性が高まることが示唆された。

19) 奥羽大学学園祭において学生が主体として行ったBLS体験コーナーの概要

○青沼 哲, 吉田 健司, 渡邊 崇, 鈴木 悠介
宮腰 義隆, 神庭 一郎, 伊藤 隼, 稲垣友理奈
菅原 繁, 伊東勇一郎¹, 田中 恵梨²
(奥羽大・歯・5学年¹, 4学年¹, 2学年²)

【目的】近年、一次救命処置（以下BLS）／二次救命処置（以下ACLS）に代表される救急救命手順の講習が全国的に浸透しているが、緊急時の初期対応の修得については、医療従事者のみならず、一般市民にとっても重要と考えられる。今回、第5学年の臨床実習におけるBLS講習をきっかけに、救命処置に興味を持つ学生が主体となり、学園祭来場者を対象にBLSに関する啓発活動を行ったので、その概要を報告する。

【対象および方法】奥羽大学学園祭の来場者を対象に、アメリカ心臓協会のBLSヘルスケアプロバイダーを取得した11名の学生が主体となり、救命処置法の概要、重要性を解説した。さらに展示物を配置し、BLSの体験コーナーを設けた。来場者には蘇生に関する用語の認知度と救命処置に関する意識調査を行った。

【結果】1. 全来場者数は123名（1時間当たり20名）であり、聞き取り調査の回答者は93名であった。2. 蘇生用語の認知度として、BLSは37%、CPRは27%、ACLSは17%であった。AEDは62%であり、他の用語に比較して認知度が高

かった。3. 緊急時の対応については、90%の人が「助けたい」と解答した。4. BLS体験後は、わかりやすくBLSやAEDを体験できたことで、救命に関する意識の向上と、われわれ学生の活動を評価する意見が寄せられた。

【考察】人が目の前で倒れるという緊急事態に遭遇した際、冷静に対処するためには、事前に知識や技術の習得が必要である。臨床実習よりBLSの重要性・必要性を学び、そして、知識・技術を向上させるためにBLSヘルスケアプロバイダーを取得することは、冷静に対処する上で有意義であると考えられる。

【結論】今回の学園祭での来場人数は、われわれ予想をはるかに超えるものであり、一般の方々へのBLSへの興味は高いと考えられ、われわれも教えることの喜びを学ぶことができた。また、今後も続けてほしいという意見が多くあったことから、このような活動を継続して行くことに意義があると思われた。